

# 道後上人坂

(小説「残りの坂」を改題補筆)

著者 青山淳平

挿絵 柳田補

発行所 社会思想社



その夜、万作は遅くまで「聖絵」に見入っていた。

鎌倉末期から室町時代にかけて、時衆は貫賤を問わず人々に迎えられ、踊り念仏の熱気に日本中が湧きかえっていたのである。この一遍時衆の魅力の根本はどこにあったのだろうか。

万作はこのころ、「聖絵」の巻末に強い関心を持っていた。

「聖絵」には他の絵巻物にくらべて、特異なほど多くの下層民が描かれ、これらの数は巻が進むほど目に見えて増えてくる。この事実は何を物語るのだろうか。万作はまだこのことを深く掘り下げて考えてみたことはなかった。

さらに「聖絵」を注意深く見ていくと、一遍のにゅうじやく入寂の場面が近づくにつれ

て、それまで画面の隅にいた乞食・非人の集団が床にふ臥す一遍の方へ移動してくるのは不思議である。臨終の場面では、かれらは一遍にけちえん結縁しようとする人々の輪の中へ分け入ってさえいる。最後の場面では、一遍の死を追って海へ入水往生する二人の犬神人の姿が大きく象徴的に描かれるようになる。

この殉教の場面はひよっとして、何か別のことを暗示しているのではないだろうか。

上人坂の一角にいまも残るスナックで、客を引く女の嬌声が聞こえてくる。

万作は水の中で堅く手を結んだ犬神人の姿をしばらく見入っていた。

翌朝早く、アパートへ思いがけない女が来た。

倉田の妻である。

部屋へあげるわけにもいかず、万作は通路で挨拶もそこそこに静江と向かいあった。彼女はいつになく厚化粧をしている。

「わたし、もうみさかもなく、ここへ来てしまいました」

静江は苦しそうに訴えると、目頭に涙を浮かべた。

万作は彼女の気持ちをそらすように視線をはずすと、坂の町並みを眺める。

日はすでに高く、黒っぽいいしか葦の上で鯉のぼりが泳いでいる。

「さつき、マンションに行つて……」

と、声をつまらせる。

「そうですか、倉田と話しましたか」

「それが……」

とすがるような表情になった。

「わたし、どうしても中へ入れなかった……」

と唇をふるわせる。

「わかりました。ここでは何ですから、私の方から店に出向きますよ。そこでゆっくり話しを聞きます」

「いえ先生、これからわたしとマンションに行ってください」

静江は迷いを断ち切るようにいう。

「マンションへ？」

「ええ、今すぐ。下の車で待っています」

というとき静江は踵を返した。万作が廊下の手すりから坂を見下ろすと、白いベンツが停まっていた。

「昼前に講座が一つあるので、それが終わればなんとかありますが」

万作は静江の背に声をかけた。静江はふりむくとせがんだ。

「それではいつ、どこで？」

「三越のレストラン、十二時」

万作が応じると、静江の眼差しが少し恥じらうように和んだ。

この日、もう一つ思いがけないことがおきた。

カルチャー教室の講座を終えて、すぐ隣の三越へ行こうとした万作を一人の受講生が呼びとめた。

教室の出口でふり返ると、

「江波先生、わたし、栗原槇子です」

とその受講生は名乗った。

万作は思わず、小脇にかかえていた本を落としそうになった。

傍らを他の受講生が会釈をしながら通り過ぎる。

「手紙は、あなたでしたか」

やっとそれだけというと、好きな絵を見入るように、万作は槇子を見つめた。

万作が想像していたよりもずっと若々しい。鼻筋がすっと通り、いかにも涼しそうな眼である。

「あれから、わたし、もう一度北谷へ行きました」

と槇子は硬い表情で報告した。

万作はすぐ手前の椅子に腰をおろし、本とノートを机の上においた。

教室は二人だけになった。

「周りの田は代かきが始まっていますから、水が引かれるのもすぐです」

「そうか、いよいよ田植えですか」

「秋になったらあのあたり一面、黄金色ですよ。聖絵のとおりです」

「ほう、そんなに、似ていますか」

と万作は北谷の環境を訊く。

「あら、先生はまだ行かれていませんか」

と槇子は心外な顔で万作を見る。

「ええ、まだ行っていません」

万作はそつげなく応えた。

槇子の顔にはとがめるような表情が浮かんだ。

彼女は万作から少しはなれた椅子にそつと腰かけると、机上に両腕を伸ばし、左右の指を組み、視線をそこへ落した。ブラウスから甘く薫りたつ匂いがする。

「わたし、一遍さんのことで突然、あんな手紙を差し上げてしまい、失礼なことをしてしまいました」

「いや、とんでもない。こっちこそ返事が遅れてしまい、申し訳ないことをしました」

万作はためらいがちに詫びた。

槇子の表情が和み、親しみをにじませて、

「わたし受講生になって、先生にお返事を催促しているみたいですね。年甲斐もなくなんだか恥ずかしいわ」

というと机上から両手を膝のスカートへ移し、視線を指先へ向けた。

「私のほうこそ、一度お会いせにやいかんと思っていました」

「本当ですか、先生」

「ええ、本当ですとも」

万作が素直に応えると、槇子は立ち上がり紺色の紙袋から桐の小箱を取り出した。両手をそろえて万作に差し出す。

自分の窯で焼いたという燭台だという。

「よろしかったら、お部屋に飾ってください」

万作はつられるように立ち上がり小箱を受け取った。

化粧のない顔に、明るい色のルーージュを引いた唇が万作の目の前にある。

礼をいい、それから、

「実は、ちよつと約束がありました」

と断りをいった。向いあっていると気分が高まり、話したいことが次々に浮かんできそうだが、静江と三越で会う時間が迫っていた。うまく説得できないと、マンションへ行くようになるかも知れない。

「すいません。お引きとめして」

「少しだけなら、まだ時間があります」

「じゃあ、わたし、よろしかったら歩きながらお話しします」

と槇子はいいい、教室の外へ歩きだした。

彼女は階段を下りながら、手紙に書いた農夫のことがわかりそうだといった。

この前、北谷に行った帰り道、閑室の記念碑を制作している正岡という石材店を訪ねた。作業場にいたのはまだ若い石工だったので、ちよつと意外だったが、話してみると一遍の知識は豊富だった。話し込んでみると、青年の祖母が

やってきて窪野の昔話になった。そして槇子が大学生の時、丹波の記念碑の前であった農夫というのは、村下という集落の別府銀蔵さんじゃなからうか、と祖母がいった。村下は窪野の南端の集落で、丹波からは谷川に架かる木橋を渡った先にある小さな台地のあたりだという。槇子は今度、その集落へ別府銀蔵という農夫を訪ねるつもりである。

二人は表通りへ出た。昨日、川瀬のいる大学キャンパスのポプラ並木に吹いていた五月の風が、今日は舗道のプラタナスの葉をなでている。

「あなたがとても熱心なので、驚きました」

離婚して郷里へもどり、陶芸作家として生きていこうとしている槇子のなかに、一遍がよみがえっている。結婚生活がよほど意に沿わないものであったのだろうか。ともあれ、万作は願ってもない研究仲間を得た気がした。

「学生時代の宿題、放ったままでしたから」

「宿題ですか」

「はい。わたしには大事な宿題です」

と槇子はきつぱりいうと立ち止まり、

「先生、手伝ってくださいね」

甘えるようにいった。

五月の風が万作のからだの中を吹きぬけていくのを感じる。

はるか遠くへおいてきた感覚だった。